

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	臨床判断能力の向上を目指した高機能シミュレータを用いた教育手法の検討				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	田中 範佳
	研究分担者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	山田 紋子
		所属・職名	看護学部・教授	氏名	林 みよ子
		所属・職名	看護学部・講師	氏名	前野 真由美
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	鈴木 郁美
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	中岡 正昭
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	星 有紀
	発表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	田中 範佳

講演題目	臨床判断能力の向上を目指した高機能シミュレータを用いた実習における 学生のグループ人数に関する検討
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>看護師の不十分な推論は重篤な医療事故に繋がると報告され、アメリカで学士号を持つ看護師の7割に推論能力の欠如があると指摘されている。看護学部成人看護学領域では4年生を対象に臨床判断能力の向上を目指し、高機能シミュレータを導入し実習を行っている。コロナ禍での実習では3密を回避するため実習場所の変更や学生のグループ人数を3名から5名への修正を余儀なくされた。特に、シミュレーション教育における学生のグループ人数について十分な検討がされておらず、最適な人数が不明確な状況で行っている現状がある。そこで、学生のグループ人数の違いによって評価スコアに差があるのか検討することを目的とした。事前に学生へ実習の評価スコアを用いることについて、十分な説明を行い、書面にて同意を得た。評価の比較に用いた年度は令和4年度と3年度とした。それぞれの年度のシミュレーション教育内容および担当教員は同一とした。評価の対象者数は令和3年度は83名、令和4年度は110名であった。令和4年度の評価スコアは77(74-79)中央値(四分位範囲)であり、令和3年度80(77-81)に比べて有意に高かった($p < 0.01$)。シミュレーション実習に最も関係すると考えられる科目の評価スコアを共変量として平行性の確認し、共分散分析を行った結果でも、学生のグループ人数を5名とした令和4年度は令和3年度の3名のグループに比べて有意に高かった($p < 0.01$)。一般的にメンバー全員が貢献できる1グループの人数は5人から8人が理想的であると言われている。シミュレーション実習では脳卒中をはじめ、心筋梗塞等の症例を用いているため、解剖学や生理学など既存の学習が重要となる。多くの学生が知識を臨床判断へ繋げることに難渋するが、3名より5名の方がヒントとなる意見が出る機会が増え、良いディスカッションとなったことが高いスコアになったと考えられた。今後の展望として、シミュレーション実習における学生のグループの最適な人数を目指して今後も引き続き検討していくことが必要であると考えられた。また、プロセス全体をデジタル化するデジタライゼーションを活用した教育について検討していくことが必要であると思われる。</p>